



鈴木たろう・小林剛・村上淳著 『デジタル麻雀の達人』 (マイコミ麻雀 BOOKS)

(以下は、上記書籍に特別寄稿として掲載された文章です)

とつげき東北

本書で述べられている「オカルト」とは、主に麻雀における疑似科学・超科学的な現象ないしそれを信奉する立場を指すのだろう。麻雀のオカルトは、一般的な他の疑似科学とも共通する大きな特徴として、「再現性がない」という特徴を持っている。再現可能な手法こそ初めて技術と呼びうるのであって、そうでない「技術論」は、物理的な現実と無縁であり続けるという意味において、技術論というよりむしろ精神論と呼ぶ方が適切である。「オカルト」は、その観点でいえば、麻雀における精神論と換言してもよい。

将棋などの他のゲーム、スポーツ、果ては受験やビジネスに至るまで、実はこうした精神論をネタにした話題は山ほどある。野球やラグビーなどのスポーツでは過度な根性論や誤った戦術論が叫ばれたり、ビジネスでは成功に必要充分とされる嘘臭い心構えなどが喧伝されたりする。実際にはそれらの成否は、一定の環境的な制約に基づくのであり、気持ちの問題でどうにかなるものではなく、また事実として起きる諸事象を無視して通用するわけでもない。他の世界でもそうであったように、麻雀の世界でも、十分な検証を伴った優れた技術が生まれる代わりに、検証を欠いた、思い込みや印象に基づくニセモノの「技術」が嫌になるくらい生み出されてきた。

なぜこんなことが起きるのか。ことは簡単である。検証ができなかったためであり、もっというと検証が必要なほどその世界が洗練されていなかったためである。特に、もともと偶然性が高く、ギャンブルのイメージの強い麻雀では、勝ってしまえばそれで良く、理由付けなど後回しでよかった。いざ勝って理由を問われたときには、検証に基づく戦術などといった大それたものを披露するよりも、精神論的なものを提示する方が楽だし、一般的な麻雀ファンもそれで充分満足だった。

だがここで倒錯が起きる。

精神論が、ついには技術論より優先されてしまうような事態を迎えるのである。勝った

人の言った「デタラメな技術論＝精神論」が、あたかも真実であるかのように流通しはじめた。人間が共通して持つ、ある種の素朴な認識上の錯覚を内包したままの「技術論」を、麻雀界は今日に至るまで後生大事に抱えてきてしまった。戦術を読む側、聞く側もまた精神論的な語りに慣れていて、それを求め、呼応する形でそうした戦術が受け継がれる。

検証済みの技術体系が完備されている世界では、精神論に出る幕はない。コンピュータが世界チャンピオンに勝つようになって以来、チェスの世界から変な精神論は消えつつあるし、スポーツ科学の進展で根性論は減りつつある。しかし麻雀界はそうになっていない。新しい戦術を、検証して提示・受容するという風潮・訓練ができていないのだ。

当初、技術論の不足を補完するためだけに造り上げられたはずの精神論的なニセモノの体系は、時として凝り固まり、新しい技術導入を阻害するための構造的な不協和音として機能するものである。誤った先入観、と言い換えればよいだろうか。「ツキ・流れ」などの概念はまさにその典型だろう。それらは、当然正しく検証されてきたわけではないばかりか、むしろ検証されること自体を否定する。

少し広い世界を見渡せば、検証を回避することによってのみ成立するインチキな流説が目にとまる。反対意見に対する完全性不備の指摘（「流れがないとは言いきれない」とか「理屈だけで勝てるとは限らない」など）をしたり、アドホックな仮説を立てたり（「その検証は特別な環境で行われたものだ」など）、あるいは定義を変更したり（「流れはそういう意味ではない」など）するような精神性こそ、超科学主義者に共通する行動形式であり、それらは（真の）技術の発展とともに解消されてゆくべき宿命のものなのである。卑近な例を挙げるなら、パチンコ・パチスロの攻略法でさえそうだった。昨今、スロプロと呼ばれる人々は、ツキや流れの代わりに確率やデータで台を選ぶようになった。

一方、麻雀の世界ではこれまで、精神論＝オカルトに、ほとんど誰も異議を差し挟まなかった。オーソリティの多くが旧世代の（オカルト全盛期の）方々であり、彼らの意見を無碍にできなかったという事情もあるだろうし、また母数や勝ちあがりシステムの問題からして、勝者の多くが「オカルト派」であることが多かったということもある。「実績もないのに、なんだ」というわけである。

しかし、精神論に依拠するあまり、技術論の進展が妨害される悪しき風習は、断じて後世に残してはならない。スポーツ、ビジネス、医学や経済学——種々の領域が歴史的に体験した「オカルトからの脱皮」は、不可避である。オカルト的な話を一切やめろ、というのではなくて、時代の変化とともに、精神論的なものを信用しない打ち手が、徐々に登場しつつある事実から目を背けるな、ということである。麻雀界には、そうした新世代的なファンに対しても「語り」得るための、新しい言説が必要なのではなかったか。

今回本書において、その口火を、他ならぬ麻雀プロが切ってみせることは、新しい一つの時代的な潮流を感じさせずにはおかない。かくいう私も現段階で本書の内容を確認できていないが、その姿勢には惜しめない拍手を贈りたい。麻雀界の「触れてはならない部分」に踏み込む覚悟は、生易しいものではない。その行為は、オカルトを切り捨てた後に残った部分に、新しい技術を挿入してゆく必然性をも内包しているからである。

私も多くの麻雀ファンも、「その時」の到来を待ち望んでいる。本書が、まさしく第一打となり、やがては美しい最終形につながってゆくことを、願ってやまない。